

夢先案内人

大石和洋

はじめに

男は、まさかこんなことになるなんて、想像もつかなかった。

男は中年の独り者。

札幌で、来る日も、来る日も、油の臭いがする鉄工所で働いていた。

平凡な日常を送っていた男に突然訪れた出会い。

まるで、夢をみているような出来事に男は困惑する。

それは、幼いころに死に別れた。両親の形見の一枚のレコードのタイトルのようだった。

そう、あの日仕事を終え、帰宅する途中にあんな場面に出くわさなければ。

今日、この日は迎えることがなく、ただひたすら働き、歳をとっていくのだと思っていた。

まるで、夢を見ているようで、シンデレラが空から舞い降りてきたような出来事だ。

人は誰もが夢を見る。

眠っているときの夢、異性との出会いの夢、恋愛の夢、家族への夢、将来への夢……。

人は夢を導いてくれる人のことをこう呼んでいる。

夢先案内人——。



もくじ

はじめに

第1章 女子高生との出会い

第2章 事件と恋

第3章 悲しみを超えて

第4章 エピローグ

あとがき

2

5

55

141

204

221

第1章 女子高生との出会い

修司は機械の油の染みと臭いが染み込んだ作業服を着て、そわそわと身の周りを気にかけながらレジに並び、会計の順番を待っていた。深夜十二時を過ぎたドンキホーテの店内は若者からお年寄りまで幅広い年代層のお客で賑わっていた。

修司の後ろに並んでいる二十代後半の女性客が買い物籠の中身を見て、不審そうな顔をして修司を眺めてはあわてて目をそらす。三台のレジカウンターのスペースにそれぞれ、七人から八人のお客が会計を待っていた。生憎、真ん中のレジに並んでしまった。修司の前にはまだ三人のお客がまつている。左右、前後、さらには斜めと、ちよつど修司を取り囲むようにして若い女性客が不審な顔つきと冷ややかな眼差しを浴びせる。運悪くキャッシャーまでもが二十歳を過ぎたばかりの若い女性店員、波多野と言う名札を付けている。波多野は買い物籠に入れた商品を一品、一品、よく通る声で読み上げ、バーコードをレジに読み込ませ空の買い物籠に移していく。

ようやく修司の順番が回つて来た。ほんの五、六分位の待ち時間が、ずいぶん長く感じられた。修司は重い荷物を持ち上げるように腕を震わせながら、恐る恐る買い物籠をカウンターの上にあげた。波多野が「いらつしやいませ」と両手をお腹の位置で組み丁寧にお辞儀をして、籠の中を覗くと一瞬、顔色が変わつたのが分かつた。

修司はごくりと生唾を飲み込み、下を向く。波多野が平然と籠の中の商品を手に取り、やや大きめな口調で商品名を読み上げて、バーコードを読み込む。

「女性用キャミソール一点、ブラジャー一点、パンティー一点、Tシャツ一点、スカート一点、以上五点で宜しいですか？」

女性客達の冷ややかな眼差しが修司に浴びせられる。何事かをひそひそと囁かれているような気がする。修司の顔は湯であがったタコのように熱を発し「はい」と頷く。

波多野は、歯切れのいい口調で

「七八三〇円になります」と言い冷笑する。

修司は震える手で財布から一万円札を取り出し波多野に差出す。

「一万円からで宜しいですか」

修司は無言で頷く。それを確認してレジに預かり金一万円と打ち込むと、波多野はまるでいじめっ子のように、ゆっくりとつり銭を用意する。

その行為は明らかに修司を周りの女性客達への晒し者にして楽しむかのように二枚しかない千円札を二度、三度と間違いないか確認する振りをして時間を稼ぐ。次に小銭も同じように何度も数える。

修司の額から脂汗が額から顔を伝わる。もう何時間もこの場所に居るような気がする。

ようやくつり銭が入った皿が修司の前に置かれ、波多野は笑みを浮かべ、

「お待たせしました。二一七〇円のおかえしになります」と言う。

修司は皿の中のつり銭を驚みにして、作業服の胸ポケットに押し込み、買い物籠を持ち包装台へ移動しようとする。波多野はご丁寧にも、籠からスカートを取り出し、畳み始めた。次にピンクのキャミソールにピンクのパンティーにブラジャーとまるで周り人に見せびらかすように、買い物袋にゆつくりと入れていく。

「お客様お待たせしました」と修司に手渡す。

修司は汗ばんだ手で袋を奪い取るかのようにして受け取ると、急いで立ち去ろうと二歩足を踏み出したところで、波多野に呼び止められる。

「お客様、傘をお忘れでございますが」しまったと思つて振り返ると、他にレジを待っているお客達が修司の視界に入り、いかにもこの男は変態だと言う視線が浴びせられる。

修司は傘を握り締めるとまるで万引きを見つかつて逃げるかのようにその場を立ち去つた。

「ありがとうございます」と波多野のよく通る声が、店内のBGMより大きく聞こえるきがした。エスカレーターを勢いよく駆け下りて逃亡者のように店内を走つた。出口まできて、一息つく、呼吸が乱れ、肩で大きく息をする。

外は大粒の雨が降り注いでいる。駐車場の自分の車まで約五十メートル。一刻もこの場を立ち去ろうと傘も差さずに雨の中へ飛び出し車に向かって走り出す。

真夏の生暖かい空気と雨が全身を突き刺す。雨で視界が悪いが全力で走りぬけ、黒の日産キュー

ブのロックを手早く解除し運転席へ飛び込む。雨で濡れた身体が座席を濡らし、長い髪の毛から滴り落ちる雨水がハンドルを濡らした。

修司は肩で息をしながら後部座席に置いてあった仕事の時に使っている油の臭いが染み込んだタオルに腕を伸ばす。濡れた顔を拭い髪の毛を拭いたタオルは、あつとゆう間に雨水を吸い取る。タオルを助手席に投げ座席にもたれ呼吸を整える。まだ興奮が治まらない。コンソールボックスに置いてある煙草を手に取り、百円ライターで火を点け大きく吸い込み、溜息を吐くように煙を吐くと、暗く蒸し暑い車内に白い煙が漂う。エンジンを掛けると空調の吹き出し口から生暖かい風が勢いよく吹き出す。

修司は煙草を口に運びながらぼんやりと前を見つめる。大粒の雨が勢いよく音を立てウインドガラスに当たっては弾ける。さつきまでの光景を思い浮かべると、恥ずかしさが込み上げて来て心臓の鼓動が早くなる。

大体、なんで俺があの見ず知らずの女子高生のためにここまでしなきゃならないんだと、叫びたくなる。

修司の頭の中に昨日の夕方の光景が思い描かれる。

勤めている鉄工所の帰り道、いつものように弁当箱と水筒を持って稲積公園の園内をオレンジ色

の夕日を眺めて歩いていると、砂場で十人位の女子高生が、違う制服を着た女子高生を囲んで、不良言葉を浴びせながら蹴り飛ばしたり、突き飛ばしたり、平手で殴ったりしていた。

大人達が、何人か顔を攫めながら見ていたが誰も恐ろしくて止めようとはしなかった。

女子高生は、無抵抗で殴られ、蹴られ砂場を這いずり回っていたが、ついに動けなくなりその場に倒れこむ。リーダーと思われる女子高生が、

「臭いんだよ。この乞食がよええ」と言いながら、倒れている女子高生の顔を靴の踵で踏み躪った時、修司の堪忍袋の緒が切れた。

「やめろ、やめるんだ」と言いながら駆け寄り、顔を踏み躪っている女子高生を勢いよく、突き飛ばす。背が高くて筋肉が、がっちりとした体格の修司に突き飛ばされた女子高生は、ものの見事に砂場に顔がのめり込んだが、すぐに起き上がって修司めがけて

「なんだ、このおっさんが」と突つ掛かってくる。仲間の女子高生たちも詰め寄る。

さすがの修司も、いくら女相手とは言えこれだけ人数を相手にするには無理がある。もう十歳若ければと思うが、現実には三七歳。話し合いだけで付き相手では、到底なさそうだ。突き飛ばされて声を荒げて向かってくる子の胸倉を、力を込めて握り締め自分の方へ引き寄せせる。

「お前がリーダーか」と訊く。

「なんだよ、このおっさん。うぜん、だよ」